

セルバンテス作、牛島信明訳「ドン・キホーテ後篇(2)」岩波文庫、岩波書店 2001年3月16日刊を読む

遍歴の騎士とは

1. (1)「令名^{かつかく}赫々たる騎士殿、結局のところ、悪意の闇も無知の闇も、勇気と美德の輝きを被い隠すことはできないようすな。
 - (2)なぜかといえば、貴公ががこの城にいらしてわずか6日しかたっていないというのに、早くも、愁いに沈み悲嘆にくれる者たちが、遠隔の地から、馬車や駱駝に乗りもせず徒歩で、しかも飲み食いもせず、ただひたすら貴公を慕い、みずからの苦難と不幸の救済を貴公のたくましい腕に託して、はるばるやってきたのですから。
 - (3)それもこれもすべて、世界の津々浦々にまで知れわたっている貴公の偉大な武勲^{ぶくん}によるものですよ。」
2. (1)「公爵殿、できることなら」と、ドン・キホーテが応えた、
 - (2)「このあいだ食事の席で、遍歴の騎士に対するあからさまな反感と敵意をむき出しになされた、あの御立派な司祭さんにこの場にあわせてもらい、彼が非難した騎士がこの世にとって不必要な存在かどうか、御自分の目でしかと見届けてもらいたかったものですわい。
 - (3)そうすれば、少なくとも、重大な危機におちいり、大きな不幸に直面して、極度に苦悩し悲嘆にくれる者たちが救いを求めていく先が、文人や学者の家でもなければ村の教会の堂守の家でもなく、さらにまた、おのれの住む町の境界から一度も出たことのないような騎士でもなければ、怠惰な廷臣、すなわち世の人に語り継がれ記録にとどめられるような手柄や偉業^{あさ}をみずから立てようとはせずに、噂話の種としてそうした新たな武勲^{あさ}を漁るがごとき、宮仕えの柔^{やわ}な騎士でもないことを経験で知ることになったでありますから。
 - (4)苦悩からの解放と困窮からの救済は、いかなる種類の人間よりも遍歴の騎士にこそふさわしい務め^{むせ}でござる。
 - (5)したがって拙者は、自分が遍歴の騎士であることを天に深く感謝し、この誇り高き任務の遂行においてわが身にふりかかる、いかなる不幸や災難も、むしろ喜んで甘受すべきものと考えております。
 - (6)さあ、伯爵夫人にここに来ていただいて、何なりと頼んでいただきましょう。拙者のこの腕の力と、鬱勃^{うつぱつ}たる勇気と不退転の意志により、その方を窮地からお救いしてみせましょうぞ。」

P.218 ~ 220

<コメント>

今年没後 400 年を迎えるスペイン文学の巨匠、セルバンテスの代表作「ドン・キホーテ」岩波文庫版の第 5 冊目。読めば読むほど中世ヨーロッパの人々が目指す「騎士道精神」の理想像が浮かび上がってくる。もしかしたら日本人に今一番必要とされるものかもしれません。是非、御一読を

— 2016年7月15日(金) 林 明夫記 —